

① 東京のベンチャーと協同し、山陰で初めて建設用3Dプリンターを活用 ② 3D計測技術を駆使して建設現場を「見える化」し、護岸整備工事における高精度な測量と効率的な施工管理を実現 ③ 現場へのICT導入には先駆的に取り組んでおり、国土交通省の「インフラ大賞」受賞を始め、全国的にも高い評価を受けている ④ 新規なデザインとカラーリングが光る本社1階フロア ⑤ バイオディーゼル燃料の製造・活用に向けた連携協定を雲南省と締結

31

LEADING COMPANY

技術サービスによる価値創造で 地域の未来を切り拓く

県下トップクラスの実績を誇る総合建設会社《カナツ技建工業株式会社》。現場でのICT導入も先進的に行っており、国土交通省の「インフラDX大賞」を23年度と24年度において2年連続受賞した。

高度な施工技術に加え、全国的にも高く評価されているのが先駆的に取り組んできた現場へのICT技術導入だ。過去8回表彰があった国土省の「インフラDX大賞」(前身の「TIC Construction 大賞(含む)」)を全国で唯一、4回受賞。

金津式彦社長(51)は「新しいことに挑戦しようとする土壤が社内にあるんです。さまざまな生産性向上を実現しています」と胸を張る。

25年秋にリノベーションした本社玄関には、会社の姿勢を象徴する大型LEDビジョンを配置。デザイン

「インフラDX賞」受賞

「現場の生産性向上に注力し

者の利便性を向上させた。「築50年

の社屋ですが耐震性に問題なく、既存建物を生かした意匠性の高い空間づくりに挑戦。お客様や社員の環境

向上、ブランディングにも注力しました」と金津社長。近年利益率を向上し、大幅な賃上げも実現した。

新たな事業展開にも意欲的だ。16年には全国でリノベーション事業を

展開する『リノべる』(東京都渋谷区)と業務提携し、エリアパートナーとして広島と福岡でショールームの運営を担う。2年前からは東京の運営を担う。2年前からは東京のベンチャーと協同し、山陰で初めて建設用3Dプリンタを活用。25年には雲南省とバイオディーゼル事業の連携協定も締結した。価値創造企業として歩みを緩めることはない。



5

1

2

3

4

1

2

3

4

5

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

1

2

3

4

</

力ナツ技建工業 株式会社

創業 昭和13(1938)年6月11日
代表者 代表取締役社長 金津 式彦
社員数 268名(男236名 女32名)
本社 島根県松江市春日町636

事業内容

土木・建築・水処理施設工事の設計並びに施工管理、公共下水道処理施設・集落排水処理施設・上水施設等の維持管理業務の受託、新築住宅・リノベーション工事の設計並びに施工管理

勤務地(採用エリア)

松江市、出雲市

採用区分

新卒採用 **キャリア採用**

インターンシップ・キャリア

有 日程が決まり次第、コーポレートサイト、またはマイナビにて順次情報公開。

採用担当者からあなたへ

私たちとは土木・建築・水処理事業で地域を支える仕事をしています。様々な研修や制度、人材育成プログラムを整えており、ワークライフバランスを大切にできる環境もあります。地元に貢献したい、建設業やものづくりに興味がある、チャレンジしたいという方、ぜひご応募ください!



経営管理部 専門マネージャー
加藤 将文さん

採用に関するお問い合わせ先

0852-25-5555

公式サイトは
こちら

Instagramは
こちら

Xは
こちら



暮らしを豊かに快適に

家庭や事業所から排出される下水を高度処理。宍道湖の水質浄化に貢献

土木・建築事業と並ぶもう一つの主軸事業が、上下水道施設などの施工・維持管理を行う環境事業。2003年からは宍道湖流域下水道終末処理場等維持管理業務を島根県から受託し、宍道湖の水質浄化や周辺住民の暮らしに不可欠な存在だ。1日に最大7万2000m³の処理能力を持つ東部浄化センターで維持管理を担うMさんは、「外国では水環境が悪くて命を落とす人も。人々の暮らしを支える仕事にやりがいを感じます」と話す。

各家庭や事業所から流れてきた下水は、ゴミや土砂類を取り除いたのち生物反応槽へ。微生物を多量に含んだ活性汚泥で有機物を分解し、窒素・リンを除去し、最終沈殿池を通って砂ろ過後、消毒して川に放流される。処理過程では多くの機械が使われており、Mさんは定期的な点検や部品交換、故障対応などを行う。「流量に異常が見られたり、異音を捉えたりしたら調査して対応します。処理工程や機械の数が多く、覚えることが多いですが、未経験でも活躍できるのが魅力です」



流域下水道管理部
Mさん(22)
2024年入社



土木工事部
Tさん(22) Aさん(22)
2022年入社 2022年入社



土木工事部
Tさん(22) Aさん(22)
2022年入社 2022年入社



土木事業の現場における施工管理は、工事計画に基づいた工程管理から設計図面に従った品質管理、労働災害が起きないように注意する安全管理などまで担うプロジェクトの司令塔。そんな現場をバックアップするのが、資材発注や予算管理、製図などを行う工務だ。

まちをつくり、未来を切り拓く

さまざまなインフラ基盤を整備
スキルアップで技術磨く

日本海に臨む松江市島根町加賀で創業した力ナツ技建。土木事業では特に港湾工事に強く、培った技術力を生かして山陰自動車道やトンネル、橋梁など数々の土木の難工事を成功させてきた。現在は大規模な架け替え工事を行っている新大橋(松江・大橋川)での作業も請け負っている。

入社4年目のAさんは、一昨年から松江市大野地区のほ場整備事業を担当。安全管理のほか、水路や田んぼ、道路などの高さや勾配を正確に測るため、「丁張」と呼ばれる仮設の目印を立てたり、トータルステーションやオートレベルなどで測量したりしている。「工区が7haと広範囲な上、作業員の数も多くて大

変です」。現場は数十人の作業員が出入りしており、スムーズに工程を進めるためのコミュニケーションにも気を配る。

同期のTさんは入社1年目から3年間、大橋川福富地区的護岸整備に携わった。Aさん同様、現場で丁張立てや測量などをを行い、構造物ができ上がっていく様子を目の当たりにした。希望して今年工務に異動し、3次元の図面データ作成などを担っている。「現場の大変さを知っているからこそ、自分の仕事が現場で生かされ、さらにそれが形となることに達成感を覚えます」。スキルアップにも余念なく、1級土木施工管理技士を取得。「この仕事に資格は大事。さらなる上を目指します」

社内外のスタッフがチームで挑む建築事業 「大事なのは現場の連帯感」

松市中心部の企業団地「ソフトビジネスパーク島根」の中核施設を始めとする各種企業の事業所を始め、松江市立病院がんセンターなどの医療・福祉施設、学校などの教育・文化施設など、建築事業でも多彩な実績を持つ。

入社5年目のYさんは現在、大手ディーラーのショールーム新築工事の施工管理を担っている。その日の作業内容や危険ポイントを伝達する朝礼に始まり、足場や電気など各種業者との打ち合わせ、仮設材の手配、安全書類のチェックなど、さまざまな作業を任せられていて、一日があっという間に過ぎる。「通常の工事と違い、エリア内に一般的のお客様が入ってくるので、安全

配慮が一層重要。店舗の休業日に合わせて作業内容を変えるなど、工程管理も工夫しています」

同期入社のKさんが印象に残っているのは、松江市内にある養護老人ホームの新築工事だ。10億円規模の工事の現場を初めてメインで担当し、作業スタッフの差配や工程管理などを担った。「職人さんたちが気持ちよく働けて、予定通りに工事が進むように四苦八苦しました」。幼い頃、自宅を改修してくれた職人の仕事姿に憧れて建築業界へ。昨年1級建築士の資格を取得し、次は1級建築施工管理技士を目指している。

2人は同じ現場で働くことも。「工事の成功には現場の連帯感が何より大事」と声を揃える。



AssetDesign事業部 福岡事業所
Kさん(33) Eさん(28)
2018年入社 2024年入社



建築工事部
Kさん(27) Yさん(25)
2021年入社 2021年入社



建設工事の現場では、足場や電気、塗装、大工などさまざまな分野の技術者たちが出入りする。彼らと綿密に打ち合わせをして工程を管理し、品質や安全面にも責任を持って気を配るのが、施工管理の職務だ。専門知識に加え、コミュニケーションスキルも問われる。